

熊谷陣屋の型

(一月横浜喜楽座芝翫所演、二月柳盛座狂言)

黒頭巾 (編注：渡辺霞亭)

〈出典：「演芸画報」明治41年4月号〉

時の太鼓にて幕開けば、本舞台正面黒段附高二重、白木造りの柱、奥は銀地に朱色の二本筋(上は細く、下は太く)を横さまに描きたる襖、その上手に少し前へ障子の一間、欄間へ白地に対鳩の定紋を黒く染めたる幔幕を張り、中央を紫の総房にて絞り、上手は黒き塀にて見切り、下手には柴戸をしつらえ、黒塀の前に、花咲き匂う桜の大樹、制札などあり。すべて熊谷陣屋の体。

浄『行く空もいつかは冴えし須磨の月、平家は八島の浪に漂よい、源氏は花の盛を見る中に、勝れて熊谷が陣所は、須磨に一構え、要害巖しき逆茂木の、中に若木の花盛り、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごとに、熊谷桜というぞかし。』と置浄瑠璃あり。浄『はるばると尋ねてここへ熊谷が、妻の相模は子を思い、夫思いの旅姿。』で、熊谷の室相模、眼頭に紅をさし、杖と笠とを持ち、仲間二人に太刀を包みたる錦の袋と、葛籠を担がせて向より出て来り、浄『陣屋の軒をここや彼処と尋ねしが、幕に覚えの家の紋、嬉しやここと内へ入り。』で柴戸の前へ来り、合羽を脱いで仲間に渡し、仲間葛籠を担いで下手に入る。之を見送って相模は案内を乞うと、家の子堤軍次、紫地に糸糸もて八千草を縫うたる袴にて、奥より立ち出で平舞台に下りて、相模を迎え、軍次「これはこれは奥様」といえば、相模は「オオ軍次、そなたも息災そうな、マア目出度のう。シテ熊谷殿や小次郎殿もかわることはないかの。早う逢いたい、逢せてたも、」軍次「ハア、旦那様は今日御廟来。小次郎様は先頃より御前勤めで御下りなし。まあまあ長の御旅路。お勞を御休めあつたが宜しゅう御座りましょう」と平伏す。此時遠寄の鳴物で、向より藤の方、下げ髪、白羽二重の肌着、浅黄色の着附にて、黒地に赤丸の陣笠を翳しながら走り来り「妾は跡より追手のかかる者、影をかくして給われ」と周章しげに云い、なお向うを眺めて心落かぬ様なり、相模は心油断なく、訝かしげなる面持にて二重を下り、柴戸を明けて、藤の方と顔見合はせ、「オオあなたは藤の御局様、」と柔しくいうを聞き、懐しげに藤の方は「そういやる其方は相模じゃないか、テモ久しや、なつかしや。」といいつつ、相模に伴われて二重上手にすまい、相模は心をきかして軍次を次の間へ退かせ、二重下手に住う。

相模が更めて手をつかえるをキッカケに、合方の三絃、相模『誠に一昔は夢と申しまするが、大内に御座あそばす時勤番の武士、佐竹次郎殿と馴れ初め、御所を抜け出で東へ下り、お前さまの御身の上を承れば、御懐胎の御身ながら、平家の御家門、参議経盛様方へ縁付き給うとの御噂、其折は世盛りの平家、御威勢は増々と悦びましたに、此度は源平の戦い、御一門もちりぢりと聞くにつけ、」まで云い思入あつて独語のように、「アア此藤の方さまは何となされた、どう遊ばしたと、一人苦にして居りましたに、」で、藤の方を眺め、悦しげに、「マア御機嫌な御顔を見ておめでとう存じます。」という。藤の方は相模の詞の間、心

付かぬさまにて、折々表の方を見やり、相模の詞に应えて、「オオそなたも無事でマア嬉しや、シテ懐胎で出やった時の子は姫ごぜか、<sup>おのこ</sup>男か、息災で育って居やるか。」といい、浄『つもる言の葉くりかえし、嬉し涙の種ぞかし。藤の方は涙ぐみ、』で声曇らせ、「世の盛衰は是非もなや、其時生み落したは無官の大夫敦盛とて、器量發明揃うた子を、<sup>このたび</sup>今度の軍に討死にさせ、夫は八島の波に漂よい、我のみ残るうき難儀。浅ましいは我が身の上、心の中のせつなさを推量せよや、これ相模。」といて、涙紙とり出し顔にあつ。相模「お道理で御座りますお道理で御座ります、<sup>おっと</sup>夫熊谷戻りますれば、以前の御恩もある、<sup>つれあい</sup>連合にも語り御身の片付、<sup>ごせ</sup>後世の営み、お心任せに致しましょう、」といい、力を強めて「以前は佐竹次郎と申して北面同然の武士、只今にては武蔵国の住人、志の党の旗頭、熊谷次郎直実と人も知ったる侍、」というを、引取り、藤の方は「そんならあの佐竹次郎は、今では熊谷次郎というか、」と早目に云い「すりゃあの熊谷次郎はそなたの夫よな、」と驚く<sup>こかし</sup>科軽くあり。やがて息をすい、静かに、「何と相模、以前大内にて不義顕われ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院<sup>いん</sup>宣、自らが申し<sup>なだ</sup>着め、御所の御門を夜の中に落してやったを覚えてか。」相模「ハイ、何の其時の御恩忘れてなりましょう。」藤の方「ムム忘れまい、其恩忘れずば助太刀して、そなたの夫熊谷を自分に討たしたも。」相模「エエすりゃ何の御恨みで」というを<sup>あび</sup>浴せかけて、藤の方「ササササさればいのう、最前も話した院の御所の御胤、無官の太夫敦盛を、そちの夫熊谷が討ったわいのう。」相模「エエツすりゃまあ誠で御座りまするか。」と膝をすすめ。藤の方「スリヤ其方はなにも知らぬといやるか。」相模「サアはるばる東より今来て今の物語。」といい、その後を床に渡す。浄『聞いてと胸の誠しからず、<sup>おつづ</sup>追付け夫の帰り次第、様子を尋ぬる其間、暫く御控え下され。と詞を尽し理を尽し、なだむる折に表より、』で、揚幕の中より「梶原様の御入り」と呼ぶ、この声聞いて相模は立ち上り、藤の方の、「見ん事討つか、討たせてたもるか。」というに<sup>おつづ</sup>応えながら、障子の内へ藤の方を案内す。

この時堤軍次以前の拵えにて出で、梶原平次景高を迎う。梶原は軍兵二人引き率<sup>くろいとおど</sup>れ、黒糸緘しの鎧に烏帽子を冠り、白鉢巻、甲当、陣羽織の拵にて向より出で、ずうッと高二重に上り、軍兵<sup>もたら</sup>に齎せし<sup>しろうぎ</sup>床几に腰掛け、金の采配<sup>めて</sup>を右手にもって膝にあて、軍次が「主人直実志あつて今日<sup>びようさん</sup>廟参、御用あらば<sup>それがし</sup>某に仰せ置き下され、」というを、叱るように声荒らげ、「ナニ熊谷殿は他行とな、他行とあらば<sup>せんかた</sup>詮方なし、ソレ家来共、石屋の親爺をきりきり呼び出せ。」と怒鳴る。石屋弥陀六、茶色の頭巾、土色の着附、黒き裁附にて、軍兵二人に追いつて立てられながらキョロキョロと、向うより出で平舞台下手寄にすまう。梶原グツと睨みつけ、「イヤそこななまくら親仁め、<sup>おの</sup>儕れ何者に頼まれて敦盛が石塔建てたやい、平家は残らず西海へぼつくだし、誂うべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が頼みしに違いはあるまい、サア真直に白状ひろげ、偽申さば鉛の熱湯、背骨を割って流し込む。石屋返事はナナ何と、」といえ、弥陀六恐る恐る首を<sup>もた</sup>上げ、「<sup>きて</sup>テモ楮も御無理な御詮議、先き程申し上げた通り石塔の<sup>あつらえて</sup>誂人は敦盛の幽霊五りんの事はさて置き、一りんも手附は取らず、建ると其儘石塔の喰い遁げ、せめて<sup>ひとたま</sup>人魂でも手附にとつたら、小提燈の代りに冥途へ書き出しはやられず、ほんの是が<sup>がんい</sup>そんしょうぼだい、有ようの申上げ、願<sup>せき</sup>以<sup>せき</sup>施<sup>せき</sup>功<sup>せき</sup>徳<sup>せき</sup>一切この通りで御座ります、」と

済した顔付、軍次は平次に向い、「あれ御聞きなされ、何と申しても取留なき返事、糠に釘、」  
 といいかけるを、平次いまいまげに、「悪知恵大方、石塔建てさせたわろも合点、熊谷戻  
 らば三つ鉄輪の詮議、まず其奴を引立てよ、軍次あァん内、」と座を立ち奥へ入る。石屋弥  
 陀六は軍兵と共に上手へ入る。

床の御簾あがり、黒紋付、水色の肩衣つけたる竹本連中出語りとなる。浄『日も早や西に  
 傾きしに、夫の帰りの遅さよと』で、相模奥より出で人待つ風情、浄『待つ間程なく』で、  
 揚幕の中より「旦那のお帰りィ」と呼ぶ声に軍次も奥より出づ。浄『熊谷次郎直実』で揚幕  
 をあけ、浄『花の盛りの敦盛を討って無常を悟りしが、』で出で来る。熊谷の拵は顔を砥の  
 粉で薄肉に塗り、眉毛尻から鬢までと、眼尻から鬢までと並行の二本紅で薄く隈取り、眼頭  
 へ濃く、下眼瞼へは稍薄く墨を入れ、頬から顎へは髯の跡を青黛で塗り、墨で口を割り口尻  
 へも墨を入る。鬢は生締で鬘の根元の両側へチリチリの附いたもの、上下は織物で、模様は  
 浅黄、萌黄、鼠等の色変り、亀甲へ金縁、糸の唐草入、之れへ大形海老茶亀甲の飛模様、  
 金の対鳩の紋、着附は白地錦へ金亀甲の大形、同じく紋つき、白羽二重の二枚下着を襲ね、  
 黄金作りの大小を横たえ、印籠を提げ、黒骨の陣扇を挿し、卵黄色の足袋に福草履を穿き、  
 稍首を俯向け、両眼を閉じ、両手を組み、物思いに沈みし心持にて静かに歩み来り、浄『道  
 がに猛き武士も物の哀れを今ぞ知る、』で花道七三の辺に立寄り、不図振り仰いで我が陣屋  
 を見、右の足を後へ一步踏み下げ、組手を解き、右の手首に懸けた、水晶大珠の珠数をその  
 手で取り直し、左の手を右の袖口へ掛けて珠数を右の袂に入れ、突袖をして、浄『思いを胸  
 に立ち帰り、』一杯に舞台へ来て、門外に立てたる制札を黙読し、内へ入って草履を脱ぎ、  
 稍上手寄までツカツカと歩み来て立寄り、出迎えた軍次の後に女の居るを怪しみ、顔を左  
 へ振って不審の思入あり。階段を上らんとして振かえり、浄『妻の相模を尻目につけ、』で  
 相模と顔を見合せ、直に上手斜に向いて眼を睜み、愕いた思入あり、頷いて気を替え、体  
 を屈め心地で高二重に上り、右手で太刀を抜いて左に置き、中央に座を占め、陣扇を右手で  
 抜き膝に立つ。浄『座に通れば、軍次はやがて覆いになり、』で軍次「先達平次景清殿、何  
 か詮議の筋ありとて、御影の石屋を引連れ御出あり、奥の一間に御休息。」と告ぐるを聞き、  
 熊谷「詮議とは何事ならん、」と考え気を換えて、「何事にもせよ、其方は一献を權おし、梶  
 原殿をもてなし申せ、早く行け、」と軽く云い、「ササ早く」といっても軍次が蹶蹴するを  
 見て、「ハテさて何を猶予、参れと申すに、」と叱り飛ばされ、軍次は是非なく相模の留める  
 のを払い、両手をつきて一礼し、心を残して奥へ入る。

相模は下手向きにて、烟草盆の掃除をなし、烟管の吸口を懐紙にて拭き、恐る恐る熊谷の  
 下手に来り、烟草盆をなおす。浄『跡見送って熊谷は』で、首を上手より稍下手へ向け「コリ  
 ャ女房」と大きく云い、「国元出立の砌、陣中へは便は無用と堅く申し付け置いたるに、  
 詞を背くといひ、剩え女の身として陣中まで参りしこと、」までを張って云い、「プッ不届  
 至極の女め」と睨みつけていう。相模は「その御叱りは御尤に御座りますれど、」といひ、  
 もじもじして、「案じられるのは小次郎の事、一里行ったら様子が知れようか、五里来たら  
 便りがあるかと、七里歩み十里歩み、百里あまりの道をツイ都まで、」といひさして口元へ

袖口をあて、「オホホホホおおしんき、登って聞けば一の谷とやらで今合戦の最中と、もう取々の噂故、」にて切り恥かしそうに、「子にひかさるるは親の因果」まで云い、手をつかえ、「御了簡なされて下さりませ、マアこの小次郎は息災でおりまするか。」と顔を見あげると、熊谷一寸顔をしかめ、浄『問えば熊谷声を荒らげ、』で、「戦場へ赴くからは命はなきもの、堅固を尋ぬる未練の性根、若し小次郎が討死でもしたらア、」を平常にいい、「何あんとする」と大きく張って云う。相模は「いいえいな、小次郎が初陣に、よき大将と引組んで討死でも致したら、嬉しいことござんす。」と答う。浄『夫の心に従いしけなげな言に、顔色直し、』で軽くなずき、烟管をとり上げ、「まず小次郎が手柄といッば、平山の武者所と争い、抜がけの功名、軍門へ駆け入りての働き、」を勢よくいい、少し途切れて、「手傷少々」を憂わしげに極緩めて引き、「負うたれども」を伸していい、「未代までの」で切り「家の誉さア」と大きく張って云う。相模がエエ手疵は急所では御座りませぬか。」と急込んでいうを「それぞれそれそーれ」といいながら相模の方に振りむき、陣扇で下をトントントンと敲き、少し間を置き「まだ手疵を悔む顔付、若しィ」でポンとつき「急所なら悲しいか」を手強く云わば、相模は「イエ何のいな、かすり傷でも負う程の働きは出来したと思うて嬉しさの余り、お尋ねしたが、お前其時小次郎と一所に御出でなされましたか、」と聞くに、熊谷「オオサ危しと見るより軍門に駆け入りて、小次郎を無理に引立て、小脇にひんだき我陣屋へ連れ帰りて介抱し、某はまた其中の軍に搦め手の大将、無官の太夫敦盛が討打取ったわやい、」までを早めに云う。藤の方は、浄『後に立聞御台所、我子の敵と有り合う刀、熊谷やらぬと抜く所、』で懐剣を逆手に持って突き掛けるのを、山形にあしらい、左の手で藤の方の裾を打ち、藤の方が前へ打って出るを、身を替して足を払い、倒るるを左手で襟髪を取って引き寄せ、「ヤア敵呼わり、何奴なるか、」と大きく云う。相模は取着きて、「アアこれ聊爾なされますな、彼方は藤の御局様、」というに熊谷少し驚き、「プウナニ藤のお方」と疑いながら、左手で藤の方の右手を取り、引起すように高く上げて顔を覗き込み、浄『まことにふうじの御方、思いがけなき』で懐剣をもぎとり、浄『御対面』で立上り、太刀をとりて斜に持ち、足を割り三足四足上手へ、藤の方を刀にて押すように進み、早足で中央へ戻って座り、右の手で佩びている小刀を鞘共抜いて藤の方の前へ投げ出し、左手で指ざし、少し腰を立て両手を大きく広げ、浄『飛退き敬い奉れば』で体を三つに折れて、両手をつきて平伏す。漸あつて顔を上げ、旧の如く真向きで両手を膝の上に載せ、少し伏し目になる。そこで藤の方は相模に目配し、「コリヤ熊谷、軍の例といいながら、年端もゆかぬ若武者を、能う酷たらしゅう首討ったなあ、サア約束じゃ相模、助太刀して夫を討せ、何と何と。」とつめ寄れば、相模は「アイアイ」と返事をして襦を脱ぎ「エエこれ直実殿、敦盛様は院の御胤と知りながら、甚麼心得て討たしゃんした。様子があるう、其訳は。」といい浄『云うも切なきうろろ涙、』で両手を握って胸に当てて泣くを、熊谷黙して聞いて居り、「やあ」と小さく「愚かおオろか」と大きく伸して重々しく引張り、「ソモ此度の戦、敵と目差すは平家の一門、敦盛卿はさておき、鎬を削るに誰彼の用捨がなろうや。」と大きく張っていうと、藤の方が刀の柄に手をかけ、うんと息組むので、之を避ける心で体を右に振じ、下手向で斜に両手を

つくと同時に、首を一つ振り、上手の藤の方を振り返る。これでまた上手向となり、藤の方に向って両手をつき「いやのう藤の御方、」と調子を沈め、「戦場の儀は」で左手を上げ俯向き加減にて「是非なしと御諦め下さるべし。」といい、更に「某」と小さく「其日の軍の大略と、敦盛卿を討つ次第、」にて藤の方の息組むのを両手で抑え「サ御物語な仕らん。」と正面向きに張って云う。浄『物語らんと座を構え、』で陣扇を取って右の膝につき、両手を其上に乗せて極る。熊谷「さても去んぬる六日の夜、早や東雲と明くる頃、一二を争い抜け駆の」で切り「平山」を大きく「熊谷」を稍低く頭をさげていい、「討つ取れよと打って出でたる平家の軍勢」を早めにいい、向うを透かし見る振をなし、「中に」は一調子上げ、「一トキィワァ」と伸して云い、浄『優れし緋緘』で右手に持ったる陣扇を真直に伸して向うを指し、左右へ首を振り、その陣扇で左の掌をポンと敲き、左で持ち添えたのを右へ引、膝へつき更に右の手を扇の上へ乗せて向うを見込む。「さしもの平山、あァシィらい兼ね」で相模に一寸と思入があつて、体を稍斜めに上手へ向け、陣扇で左から右へ三度打ちかえし、三度目には浄『浜辺をさして』でチンチンチンと絃に乗って、陣扇をずらッと伸して向うを指し、右足を前へ伸す。「遁出す。」で左から右へ小刻に陣扇を使い、右の足を引いて見得。「はあてえ」を長く「健気なる若武者や、遁ぐる敵には目な掛けぞ。」を絃に合せて緩やかに云い、「熊谷是に控えたり」を早目に云い、「返せ、戻せ、うおおうい、おおうい、」を遠くへ響くように声を噎らすほど張り上げた心持でいい、浄『扇を以て打ち招けば』で金地に朱の丸と、黒地に朱の丸の陣扇を颯と開き、右足を踏み出し絃につれて扇を左右にまた上下に軽く右の手頸で煽り、夫を膝に引付け、開いた儘斜に持ちて見得をなし、浄『駒の頭を立て直し』で馬を勇める心で「ヤハヤハ」と掛声し、陣扇を左の手の甲脇に両度打ちつけ、之を一廻わして逆手に持ち、馬の頭の心の振で極る。浄『波の打物、二打三打、』で扇を窄めて刀を抜く振をなし、二度天地に斬り結び、床の切に右手で扇の要を握り、内拳を内へ向け、真直に右肩より高く上げ、左手を拵げて突張り、釣合いを取り一寸見得をなす。浄『いでや組まんのおんのうせ』で一寸辞儀をし、浄『実に尤もと太刀投げ捨て、』で右手で陣扇をハッしと下に打付け、浄『馬上ながらにむんずと組み』で両手を左右から押寄せるようにし、更に陣扇を左に持ち直し、右手を左の二の腕に掛け、左手をかつぎ引組んだ心で、ツンツンツンと両度押合う振をなし、次で陣扇を開き、前へ構えて見得。浄『両馬が間にどうと落つ。』で陣扇を畳んで下へ置き、藤の方へ思入をなし、両手を膝の上へ置くと、藤の方が「ヤアヤア何と、その若武者を組敷いてか、」と問うので、「されば」と辞儀をしながら「御顔をよく見奉れば、鉄漿黒々と細眉に」を緩めて云い、「年はいざよう我子の年輩、」と沈んだ調子で云い、一寸と相模を見やり「定めし両親ましますん」を早め「その御嘆きはいかばかりと、子を持ったる身の、思いのあまり上帯取って引っ立て、」と切り、浄『塵打ち払い、』で左手にて太刀を立て、陣扇を開きて太刀の上下を軽く二三度はたき、草摺の塵を払う心を利かせ、「早や落ち給え」と少し頭を下げ、右の手の陣扇で指す。相模は「お勧め遊ばしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかったのか。」というを受けて、「おうさ」を落として云い、「早や落ち給え」で切り、「と勧めれども、イヤイヤ」と首ふる真似し、「一旦敵

に踏み敷かれ、何面目に長らえん、」までを極めて力なく哀れげに云い、「はや首打て」で少し間を置き「熊谷」は声をふるわせて長く引く。藤の方が「ナニ首討てというたかいの、健気なこと云うたのう。」と泣くを聞き、「ササササ」を早めていい、「其仰せにいとどなお、涙は胸にィ」と<sup>うる</sup>濡み声にて大きく云い、右手に持つ陣扇で胸を押え、「せえきィあアえず」と<sup>みだ</sup>紊れ調子でいい、「まッこの如く我子の小次郎、敵に組れて命や捨てん、浅ましきは<sup>ものぶ</sup>武士のォ」と又声を伸して突き上げ、「習いと太刀もォ」と雲らせし、浄『抜き兼ねしに』で太刀を左手にもち、右手で之を抜かんとして抜き兼ねる<sup>しくき</sup>仕科二度あり、目を閉じて仰向に泣き、浄『逃げ去つたる平山が』で太刀を下に置き、陣扇を取上げて向を見、浄『向うの山より声高く、』で左足を踏み出し陣扇を颯と打開いて、之を<sup>さかき</sup>逆にして左手に持って胸のあたりへ当て、右の<sup>ひら</sup>臂を曲げて陣扇の上へ乗せ、上から見下す心にて屹と大見得。夫から正面向、旧の座に直り、浄『熊谷こそ敦盛を組み敷きながら助くるは、二心あるに極まったり。』で<sup>のり</sup>乗になり、浄『呼わる声々、ハハア』で陣扇を下へ打付け、「是非もなや」を力なく云い、調子を改めて『仰せ置かるる事あらば必ず云い伝え参らせんと申上ぐれば、』といい、浄『御涙を浮べ給い』で扇を<sup>ひら</sup>抜き、その蔭にて左手を眼にあて泣く科あり。「父は波濤へ赴き給い、心にかかるは母人の事」といい、陣扇を窄めて膝につき、「昨日に変わる雲井の空、定めなき世の中をいかが過ぎ行き給うらん」を<sup>うれい</sup>愁を含みながらサラサラいい、「未来の迷いこれ一つ、」で切り更に「熊谷頼むの御一言、」をせつなそうに言い、「是非に及ばず<sup>みしるし</sup>御首をオ」と充分に曇らせて云い、陣扇を右手に振り上ぐると、藤の方がエエと息組み、寄ろうとするのを、右手を下手へついて避け、左手を延べて開き、藤の方を支えながら、「討ち」と切れ切れに云い、「奉って御座りまする。」と思切った心で早く云い、紙で額をふき頭を下げると、藤の方と相模は「ハア」と泣き落す。そこで相模が「これ」と云い掛けるのを叱る心で睨み、「コオレ、戦場のォ」と調子を張って大きく引き、陣扇を下に置き、「習えだア」と強く叱るようについて、両手を膝に構え正面を切るのが物語の<sup>おわり</sup>終なり。ここで鼻かむことあり。藤の方は両袖を胸にあて「ナア左程母をば思うなら、経盛殿の詞につき、何故都へは身を隠さず、一の谷へ向いしぞ。健気に<sup>よる</sup>擻うたその時は、母も<sup>ともども</sup>俱々悦んで、勧めてやりし可愛やな、覚悟の上も今更に、胸も迫りて悲しや。」とくどき嘆くを相模、慰め顔に声励まし、「いや申しお局様、御一門残らず八島の浦へ落ち行き給う中に、一人踏み留まり、討死なされた敦盛様は、天晴の功名、人の笑いをうけ給うが、お前の気では嬉しいか。御未練で御座りましよう。」というを熊谷黙して聞き居り、「流石は武士の妻ほどあって、御台所を御諫め申せし今の一言、出来したな。」と柔いで言い、更に「出来した出来した、必ず共に忘れまいぞや。」と念を押し藤の方に向い、「御台所この処に御座あつては御為にならず、片時も早く<sup>いずかた</sup>何方へとも御立退めされ。我も之より敦盛卿の<sup>おんしるし</sup>御首、義経公の実験に備えん。」と平に云いて小刀を<sup>き</sup>帯し、「コリヤ軍次はおらぬか、軍次、」と小さくいい、返事なきに「軍次々々」と高く呼び、藤の方に一礼して立上り、正面に向い足を割り刀を斜に右平で袴の<sup>ひだ</sup>褶を叩き、少しそり気味に後向になり、右の袂を返し、思入あつて奥へ入る。浄『入相の鐘は無常の時をうつ』で、本釣を遠く緩く響かせ家の子二人<sup>あかし</sup>燈火を縁側に点ず。浄『陣屋陣屋の<sup>ともしび</sup>燈火にいとど悲し

さ藤の方、』で藤の方『ああ思い出せば不慙やな、今まわの際まで肌身離さず持たるは、コレこの青葉の笛、』といい、紫の帛紗に包みし青葉の笛を出し、「我と我身の石塔を立てて貫うた柁にと渡して置いたこの笛の、我が手に入りしも親子の縁、』で左手で笛を少し上げ相模に示す。浄『魂魄この世にあるならば、何故母には見えぬぞ、聞えぬわ我子や、懐かしの此笛やと、肌につけ身に添って尽せぬ思い遣る瀬なや。』で帛紗と共に笛を擁くと、相模が「コレ申し、その笛がよいお形見、経陀羅尼により笛の音を手向けるが追善、敦盛様の御声をば聞くと申うて遊ばせ。」と申うて手を叩き家の子に命じて金時絵したる木製の手洗鉢を持参せしめ、藤の方は奥向に、相模は上手向きに据り、浄『勧めに従い藤の方、涙に湿す歌にも、顫うて音をぞ澄しける。』で藤の方が笛を吹き鳴らすと、浄『親子の縁の絆にや。』でウズドロの鳴物入となり、浄『障子にうつる陽炎の姿は慥か敦盛卿、』で障子に甲冑着けたる武者の影法師頭わる。藤の方は一目見るより、笛を左手で持ち、立身となって「ヤア懐かしや我が子や、」と駆寄るを相模は抱き留め、「一念のなす所あるまい事にはあらねども、訝しき障子の影、殊には親子は一世と申せば、御対面遊ばさば御姿は消え失せん。」というに藤の方「イヤ喃、四十九日が其間、魂宇宙に迷うと聞く、切めては逢うて一言を、」と振離し振離し障子をガラリと明くると、姿は見えず、緋緘の鎧ばかり残れるなり。はっと驚き、藤の方も相模も共に取り着いて、藤の方「さては鎧の影なるか。」相模「恋しと思う心からお姿と見えたるか。」藤の方「相模」相模「お局様」と顔見合せて正体もなく、泣きくどく。浄『時刻移ると次郎直実』で奥から熊谷出ず。拵は首縞、亀甲の中へ花菱総縫の上下、茶地へ牡丹唐草模様織物の着附、白羽二重の二枚下着、白足袋で、左の小脇へ首桶を抱え、高二重の中央に立つと、相模は下手に跪き、藤の方は上手から左の袂に縋り、内見を望むと熊谷「御尤には候えども実見に備えぬ中、内見は叶い申さぬ、」と云い切り、浄「はねのけ突きのけ行く所に、」で藤の方の手を軽く払い、相模を睨みつけて強く払い、二重を下りてサッサッと、花道附際に行くと、義経奥より声をかけ、「ヤアヤア熊谷、暫し暫し、敦盛の首持参に及ばず、義経之にて見ようずるわ。」と呼び留め、正面の襖を開かせて出で、上手寄に床几に腰掛け、軍兵四人鎧太刀の拵にて其後に胡座す、熊谷は振返り体を屈めて戻り、高二重に上りて稍下手に座し、首桶を前に置き、太刀を脱いで左に置き、両手をついて平伏す。藤の方、相模は熊谷の下手にすまう。義経声静かに「ヤア直実、首実見延引といい、軍中にて暇を願う汝の心底訝かしく、私に來りて最前より始終の様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首実検せん。」といえは熊谷は浄『仰せを聞くより熊谷は、ハッと答えて走り寄り、若木の桜に立て置きし、制札引抜き、恐気なく義経の御前に差置き、』一杯に、一礼して立上り縁側に來て膝をつき、右手を左し延べて制札を抜き、懐紙を出して泥を拭き、懐紙は其儘棄て、制札を右手に携えて元の座に戻り、傍に置きて平伏し、座り直して両手を膝に乗せ、「さいつ頃堀川の御所に於て六弥太には忠度の陣へ向えと、」で身を起し「花に短冊、また」で身をかがめ、「この熊谷には敦盛卿の御首討てよと、弁慶執筆のこの制札、御詮に任せ打つたる



此首、いざ御実検下さるべし。」と総体早目に云い、体を起して浄『蓋押明くれば、』で首桶の蓋を両手で上げると、「ヤアその首は」と相模が寄るので、首早く蓋を閉じ、相模を片脇に寄せ、藤の方は右手に制札を持ちて支え、「コレコレ実検に備えし後ッたお目にかける、イヤサ御覧に入れん、立ち騒いで尾籠千万、」と早目に云い、「お騒ぎあるウなア、」と大きく引張り、浄『熊谷が諫めに追が端のう、寄るも寄られず悲

しさの、千々に砕くる物思い、』の間に熊谷は制札をあしらって両女を留める形をし、途端をもたせて制札を引く拍子に、両女は二重を下りて、藤の方は上手に行き、相模は下手から取継るを制札の根で乳の下を突き、胸を押えて倒るる所を、熊谷はその儘縁側に進み両手で制札を倒さまに突立て制札を左の肩に担ぎ、右の足を三段の中へ踏み下し、上から冠せかかってグッと白眼む大見得あり。浄『熊谷直実謹んで、』で旧の座へ直り、制札を右に持ち左をつきて平伏し、「敦盛卿は院の御胤、この花江南の所無は即ち南面の嫩、一枝窃盗の輩に於ては天永紅葉の例に倣い一枝を切らば一指を切るべし、花に擬えし制札の面、御詔に任せて討つたる此首、」を早めに云い、「ただし」と引き、

「直実誤りしか、御批判いかアに、」を張って云い膝を進め、左手で制札の柄を握り、右手で首の髻を持ちて制札の上へのせ、十分に腕を伸して首をさし付ける。義経は欣然首を見やり、「ホホ花を惜しむ義経が心を察し、アよくも討つたりな、敦盛に紛れなき此首、ソレ由縁の人もあるべし、見せて名残を惜しませよ。」というので首を



下に置き、旧の座に直り、「敦盛卿の御首級、藤の方の御覧に入れよ、」と相模に云い、首を蓋に載せて縁側に置く。相模は「アイ」と声震わせ、浄『あいとばかりに女房は、』で正面向となり立ちかけて絃に乗って躑き伏し、また起き上って縁側に行き、熊谷と顔見合せて泣く。熊谷も思入あり、顔をそむけて掌らを眼にあて泣き上ぐ、此間に相模は御首を懐紙の上に乗せ、左手で持ち右手で抑えて旧の座へ来り、浄「敢なき首を手にとりあげ、見るも涙に塞りて、変る我子の死顔に、胸は堰きあげ身も顛われ、持つたる首の揺ぐのを領ずく



ように思われて、』で首<sup>しゆきゆう</sup>緞<sup>かどで</sup>をジツト眺め入り、浄『首途の時に振り返り、にっここと笑うた面  
 ざしが、有ると思えば可愛さ、』までチョボにつれて愁嘆の振あり。相摸「不愍さ、」浄『声  
 さえ咽へつまらせて、』で藤の方に向い、「申しお局様、御歎きあつた敦盛様の此首、」とい  
 いて藤の方に見せると、藤の方が「ヒヤア是は」というを受け、「サイナア、申し此首はな  
 ア、私がお館にありし時、熊谷殿と忍び逢い、懐胎<sup>みもち</sup>ながら東へ下り、産み落したはなア、こ  
 れこの敦盛様、其時あなたも御懐胎、誕生ありし其お子が無官の太夫様、両方ながらお腹に  
 持ち、」浄『国を隔てて十六年、音信不通の主従が、』で熊谷、藤の方、相模の三人思入あつ  
 て嘆く科あり。相模「お役に立ったも因縁かや。」でまた首を見せ、「これよう御覧遊ばして  
 御恨晴らし、好い首じゃと誉めてお遣<sup>やり</sup>なされて下さりませ。」と泣き熊谷に向い、「せめて最  
 期は潔よう死になされたか。」といいながら首を突きつけるので、浄『問えど夫は瞬きも、  
 せん方涙御前を恐れ、外に云いなす詞さえ、泣く音血を吐く思いなり。』で右膝について居  
 た陣扇を知らず知らず外し、一寸義経を見て耻らい、下手へ泣き上げると、相模が袖を引か  
 んとするを「プウ」と叱る。藤の方は此時声を曇らせ、「ナア相模、今の今まで我子ぞと、  
 思いの外な熊谷の情、和女は嘸<sup>そなた</sup>や悲しかろ、恁<sup>きぞ</sup>うした事とは露知らず敵を取ろうの斬ろうの  
 と、云うた詞が耻しい、我子のためには命の親、忝い。」と掌<sup>たなごころ</sup>を合せて感謝し、「此首の  
 生世<sup>なまよ</sup>の中、逢見ぬ事は悔しや、」と歎き気を替え、「是につけ訝しきは浜の石塔、敦盛の幽霊  
 が建てさせたとの噂といい、秘蔵せし青葉の笛、石屋の娘が貰いしとて我手に入り、最前其  
 笛吹いた時、あの障子にうつりし影は、慥かに我子と思いが、詞も交さず消失せたること、  
 と不思議顔なるを見て義経は、「アイヤ障子越の面影は義経が志。」という。これで藤の方も  
 安堵の科あり。浄『折節風に誘われて、耳を突抜く法螺貝の、音喧<sup>かまび</sup>すく聞ゆれば、』で揚幕  
 の中でドンチャンを打込むと、熊谷は屹と向うを見、義経は勇み立ち、「ヤアヤア熊谷着到  
 しらせの螺の音、急ぎ出陣の用意用意。」と促すに熊谷「ははあ」と応え、浄『仰せに直実  
 畏まり、』で左手に刀を取上げて前に横<sup>よこた</sup>え、両足をはり腰を屈め、義経に一礼して奥へ入る。  
 浄『最前より様子聞きいる梶原平次、一間の内より躍り出で、』で梶原は上手より出で両手  
 を大きく振って下手へ行きながら、「かくあらんと思ひし故、石屋奴を詮議に事寄せ窺う所、  
 義経熊谷心を合せ、敦盛を助けし段々、鎌倉へ注進する覚えて居ろ。」と云い捨て、急ぎて  
 花道を揚幕に入る。浄『後よりハッシと打つたる手裡剣は、骨を貫く鋼鉄の石鑿、伝とばかり  
 に息絶ゆる。』で揚幕の中でアツと悶ゆる声を聞かすと同時に、上手より弥陀六以前の拵  
 にて出で、「ハハハハハお前方の邪魔になるこつばを捨てて進ぜました。さて幽霊の御講積  
 承ってまず安堵、どれお暇しましょうかい。」と花道七三まで行くと、義経に「ヤレ待て親  
 爺、イヤサ弥平兵衛宗清待あて。」と呼び留められてギョツとし、浄『はっと思えど逸さぬ  
 顔』で、四辺<sup>あたり</sup>をキョロキョロ見廻し、「これ弥平兵衛さん、誰かが呼んでられます。何処に  
 隠れて居られるのか。」といい、義経に向い、「ハレやれ、とつけない、御影の里に隠れの  
 ない、白毫<sup>びやくごう</sup>の弥陀六という男でえす」という。義経は打笑い、「ハハハハハ誠や諺にも至つ  
 て憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは、人間一生忘れずという。其の昔母常磐の懐に抱かれ、  
 伏見の里にて雪に凍えしを、汝が情にて親子四人が助かりしその嬉しさ、其時我は三歳なり

しが、面影は目先に残り、見覚えある眉間の黒子、<sup>ほくろ</sup>というに、弥陀六「プウッ」と驚く。義経「隠しても隠されまあじ、重盛卒去の後つた行衛<sup>ゆくゑ</sup>知れずと聞きしが、ハテ堅固で居たな、満足満足。」と聞くより弥陀六つかつかと本舞台へ戻り、黒段に足をかけ、義経の顔をジッと打眺め、「テモ恐しい眼力よな、アア老子は生れながらにして敏く、<sup>こなた</sup>」といいながら片肌を脱ぎ、「莊子は三つにして人相を知るとかや。かく弥平兵衛宗清と見られし上は、」で頭巾を取れば白髪を結びし鬢、「エエ義経殿」で合方入となり、「其時此方を見遁がさずば、今平家の楯籠る、鉄拐ヶ峰、<sup>てつかい</sup> <sup>ひよどり</sup> 鶴越を攻落す大将はあるまいもの、又池殿といい合せ、頼朝を助けずば、平家は今に栄えんもの、エエ宗清が一生の不覚、是につけても小松殿御臨終の折柄、」までいいて段を下り、上手に坐し、「平家の運命未危うし。汝武門を遁れ身を隠し、一門の跡弔えよと、<sup>もろこしいくおうざん</sup> <sup>しどうきん</sup> 唐土育王山へ詞堂金と偽り、三千両の黄金を、忘れ形見の姫君一人預かり、御影の里へ身を退き、平家の一門先だち給う御方々の石碑、<sup>ごきんたち</sup>」<sup>ごきんたち</sup>と書いて指を折り、「播州一国那智高野、近国他国に建て置きし、施主の知れぬ石塔は、皆これ宗清が涙の種とな御存じ知らずや。」と袖をまくりて膝を立て、「今度敦盛の石塔詠えに見えし時も、御幼少にて御別れ申せし故御顔は見覚えねども心得ぬ風俗は、サテハ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思うより、快く承け合いしが、扱は命に代る小次郎が菩提の為めであつたるか。」といい、浄『如何に天命帰すればとて、我が助けし頼朝義経、此の両人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは、』で大きく息を引き歎く形あり。「アアッ天命天命、運命じゃな、嘸御一門陪臣の魂塊、我を恨みん浅ましや、」と頭巾を投げて泣く。浄『或は悔み或は怒り、涙は瀧を争えり。』で白頭を抑えて伏す。浄『元来敏き大将義経』で、義経「ヤアヤア熊谷、障子の内の鎧櫃、これへ持て。」と声高く呼ぶので、弥陀六は下手向におとなしくすまう。

浄『はっと答えて次郎直実、出陣の出立と、好む所の大あらめ、鍬形の兜を着し、抱え出でたる鎧櫃、』で、金の対鳩の定紋に、鹿の角の前立ある、黒小実紺糸緘<sup>くろこぎねこんいとおとし</sup>に萌黄の房、赤の紐のつきたる兜を眼深かに冠り、同じ緘しの鎧、<sup>しよくこうにしき</sup> 蜀紅錦の鎧下、白の上帯、革柄、鉄鏝、黒銅金入の太刀と鉄作りの小刀を佩き、南蛮鉄小手脛当<sup>こてすねあて</sup>をつけて再び出で、家来は鎧櫃を庭前に持ち出す。熊谷は下手に住うて一礼し、鎧櫃を持参せしことを申上ぐれば、義経弥陀六に向い、「コリヤ親爺、其方が大切に育てる娘へ、この鎧櫃届けて呉れよコリヤ弥陀六。」熊谷「ヤア弥陀六とは。」義経「フウ宗清なれば平家の余類、源氏の大將が頼むべきいわれなし。」弥陀六「ムム面白し面白し、イカにも親仁め頼まれて進ぜましよ、したが娘へは不相応な下され物、」で考え、「マア内は何で御座ります、改めて見ましよう。」といい蓋を明くれば、藤の方は「喃懐しや敦盛どの」と駆け寄るを弥陀六支えて、蓋ピツしやりと閉め、「イヤ此内には何あんにもない。」と早目に云い、藤の方と顔見合せ、息を引き、「ホホ是で些とは落ち付いた。喃直実どの、貴殿への御礼はコレコレ此制札、一枝を切らば一子をきって、」で切り、「忝い」と軽く泣くと、相模は夫に向い、「我子の死んだも忠義と聞けば、最う諦めて居ながらも、源平と別れし中、<sup>うち</sup> どうしてまあ敦盛様と小次郎を取替えようが、」と聞くので、「先刻も申す通り、手負と偽り連れ帰ったは敦盛卿、又平山を追掛け出でたを呼び戻し、首討ったのが小次郎、」で切り「エエ知れた事じゃわい。」と叱るよういので、相模は咽び

入り、「エエ胴窓な熊谷殿、此方一人の子かいのう、逢おう逢おうと楽しんで、百里二百里来たものを、驚くりと訳もいわず、首討ったのが小次郎と叱るばかりが手柄でも御座んすまい。」と嘆くに義経は勇みをつけんと、「ヤアヤア熊谷、西国出陣の時移る、用意な如何。」というに、浄『仰せに直実恐れながら、』で一礼し、「先達て願ひ上げし暇の一件愆の通り、」と沈んだ調子で云い、紙に包んだ髻を前に置き、浄『兜を取れば切払うたる有髮の僧、』で坐った儘兜を脱ぎ、半坊主鬘になるを義経見て、「オオさもありません、それ武士の功名、誉を望むも、子孫に伝えん家の面目、その伝うべき子を先き立て、軍に立たん望は、」といい膝をうち「オオ尤も、願ひに任せ暇を得さするぞや、汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常磐の回向を頼むコリヤ熊谷。」と声励ます。浄『親しき御説、ははあ有難しと立上り、上帯を引解き、鎧を脱げば袈裟白無垢、』で鎧を脱ぎ、鼠色の法衣に墨染の袈裟、白の手甲、股引、脚絆の扮装となり、珠数を手首にかけるを見て、相模の驚くを制し「なに驚くことかある、大将の御情にて軍中に御暇を賜わり、我が本懐、」を重々しく云い、「この熊谷が向うは西方弥陀の国、伴小次郎が抜け駆けしたる九品蓮台、」をシンミリといい、「一つ蓮の縁を結び、今より我が名を」まで言いかけて少し考え、「蓮」と切り「生と改めん」と続け、「一念弥陀仏、即滅無量罪、」を早目に、「十六年も一昔、」を緩やかに感慨に堪えぬ思いにて内へ呼吸を引き、「アア夢であったなあ」と落していいながら、右の掌を頭に当てて右から左へクルリと撫で、浄『ほろりと滴す涙の露』で稍伏し目になり左に持ったる珠数を爪繰り、浄『柎に置く初雪の、日影に解くる風情なり。』で下手を向き、右手で懐紙を抜き出して前に置き、其二三枚を取って両手で顔を掩い、大きく泣く。相模は「オオそうじゃそうじゃ、我が子罪障消滅の加勢は、」といいて髪を切る。浄『詞は無くて御大将、藤の局も諸共に、御涙にぞ暮れ給う。』で皆歎く科あり。浄『長居は無益と弥陀六は鎧櫃に連尺を掛けた思案の締括り、』で鎧櫃を背に負ひ義経に向い、絃に乗りて「コレコレコレ義経殿、若しまた敦盛蘇生り、平家の残党かり集め、恩を仇にて」で云い切り、「返さば如何に」と見上ぐると、義経は「オオ夫れこそは義経や、兄頼朝が助かりて、仇を報いしその如く、天運次第に恨みを受けん。」という。熊谷も絃に乗りて、「げに其時は此熊谷、浮名を捨てて不隨者と、源平両家の由縁は無し、互に争う修羅道の、苦患を助くる回向の役。」といい珠数を爪繰り、右手に綱代笠を取る弥陀六「この弥陀六は折を得て、又宗清と心の還俗、」熊谷「我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、教えを受けん、いざさらば。」で辞儀をなし、「君にも益々御安泰、」で杖を取り、高二重を下り、浄『お暇申すと夫婦連、石屋は藤のお局を伴い出でて陣屋の軒、御縁あらばと女同士、』で藤の方と相模は一礼す、其間に熊谷は下手に来り、「命あらば」と大きくいうと、義経は「堅固で暮せ」と詞に情を罩め、浄『難有涙、名残の涙』で熊谷振り返り大きく段を割った態で一礼す。浄『又思い出す小次郎が首を手ずから御大将、此須磨寺に取納め、末世末代敦盛と、其名は朽ちぬ黄札、武蔵坊が制札』をうけて、藤の方「花は惜めど花よりも、」相模「惜しむ子を捨て、武士を捨て、」熊谷「住む所さえ定め無き、」義経「有為轉變の」皆「世の中じゃなあ。」といい、浄『声も涙に搔き曇り』で義経は首をさし出して二重に立身、平舞台には下手より相模、熊谷、弥陀六、藤の方の順に並び、浄『別れてこそ

は』で相模が首の方へ駆寄らんとするを隔てて、熊谷が「コリヤ」と叱るのが木の頭、引張りの見得にて幕。